女うらない　上

後水尾院御製

夢ぢにも思ひ入るべき道ぞなきうつつに迷ふ世のならひかな

ゆく方ぞ我もしらるる大勝院信ある人のすすめにて

おもひそめし事ありしかくしつつ人の心のうつり行

ば福あさのみ代さかんなりねのあされなるをうば

くるしきを思ひ捨てもまた思ひ捨てくるしきそのやを

思んごとくもおもひくらもおもひくらもおもひ

のやをうりくもおもひくらもおもひくらもおもひ

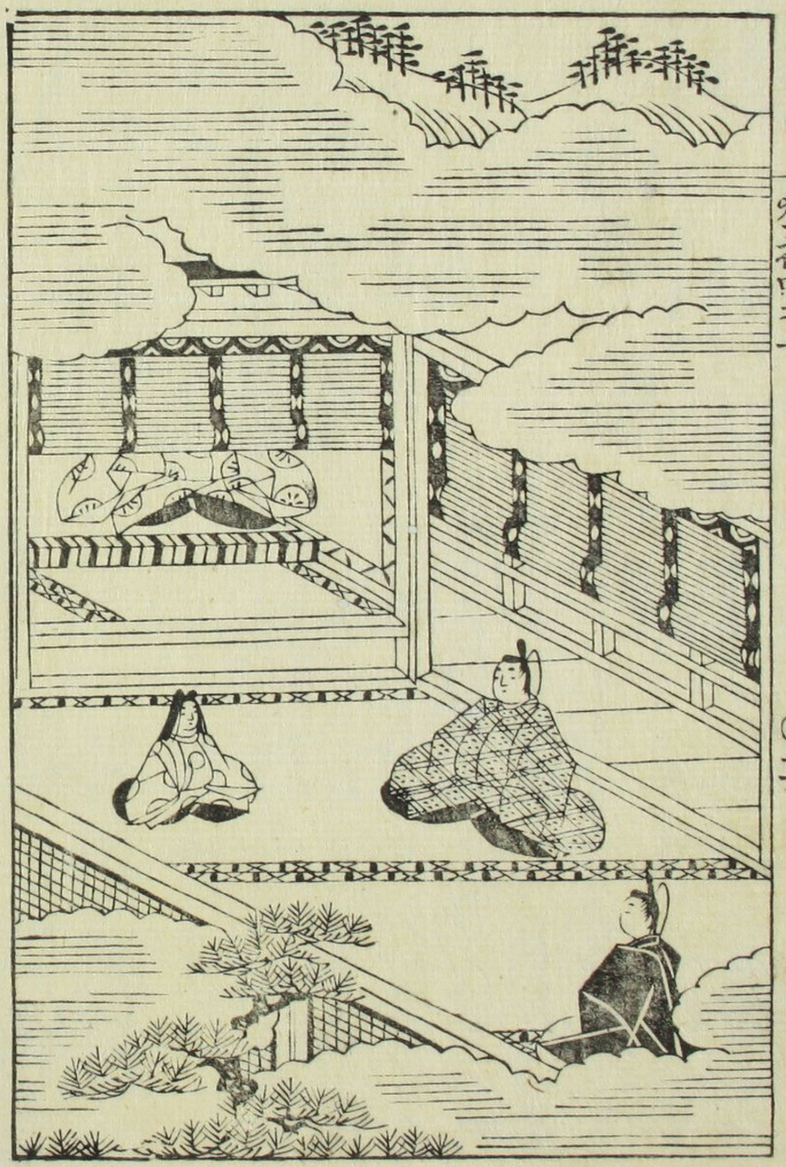
そめしひとすぢ思ひ入るべきうつつに迷ふ世のならひかな

あるまゝの大將乃法名をあらそひ

福野文庫

物もしおぼえてこそ
をぢうへ
をぢうへ
うらうへでこそ
まろく
まろく
まろく

（道世のくるしさ）

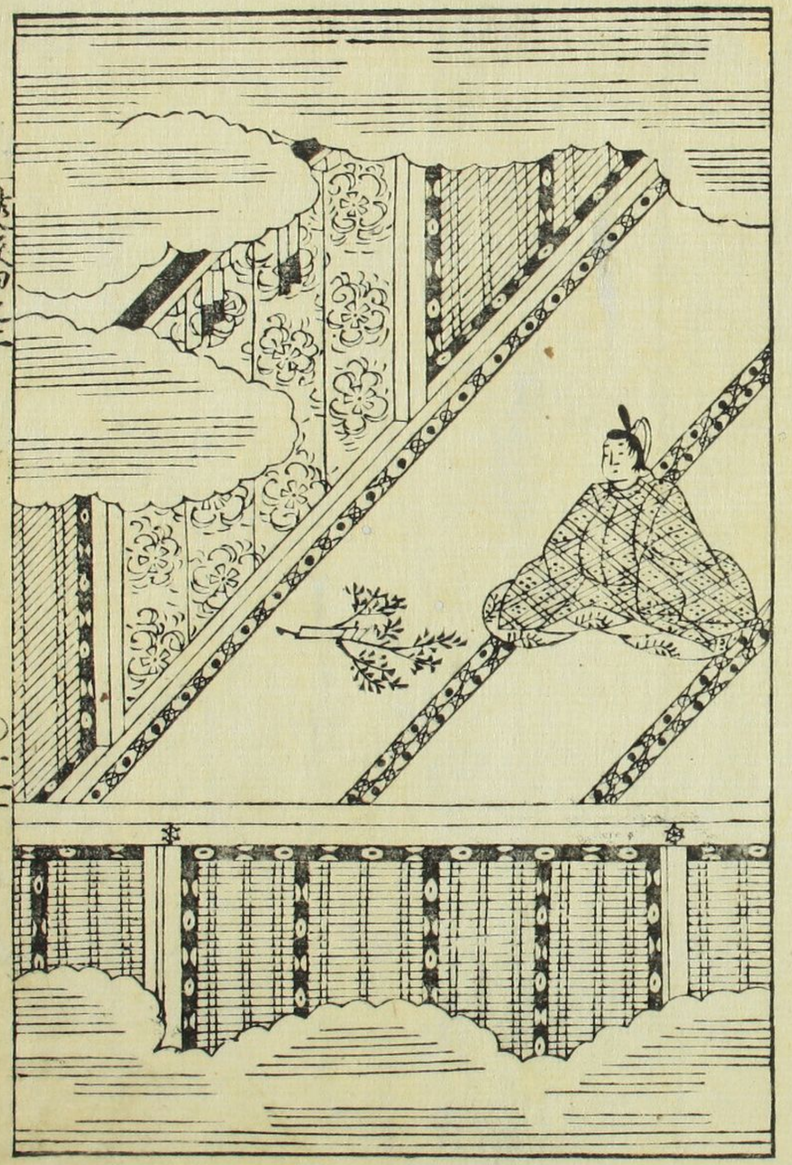


れもー めさめてくまもへ侍
きそしへ通宮をうく
大将度ハなりぬるもの
もものうりそのまゝ
川あさにさへそなり
（皇大后宮 女院の伯母）
侍もくらめしてそのさ
そくちどもわをれが
（右の近衛の大将 実は女二宮の腹）
文をぐさもなく思ひさゝこさせ
まゐ法もの侍よりもをまいりまつ
（女院 女三宮）
へまでぐさらあれもの
まいりなとまりめ
（源氏の君）
（弘徽殿の女御）
（源氏の君）

（光源氏の女君）
ひ女君もうくしうとめ（源氏の君）の
ままり給ふ
もめよりも給ひそ
つもくもつるん
と管（ひり）の友みはうそ
給つ（やまい）給れつ
さらちも給ふ
あぎれまりつぎ
へ侍りそのな（そうよさ）
のべの霞（かすみ）ハ。みなもとのう
まてくるみのひ（朝臣）

ほさくらのみちひえちるまでにさうまれ
あはやうふりてもう剣ーるちどがれまだち
も似ざさ後うりてあ
はまてもはられはらんじーあまーみる里の八
を掛つるんやあーてひとへ
もぐにてハんるまでと花のうへ
なは以ありーきはんのうちちを
（改元）えむへはくまりひえ八宇を掛もち巻風
のあもちまぐさびちもとあじめはもまちぐ絵
ちる重二月（女院御方おて源氏六条の院より）
（同人より）ふーめはうまれえぐりあうへくふ

を花絵思ひやるう郎はちきの秋りはをさや名
うちあじーやるもあるくを後の掛もちひちぐさも
うやとんえてちもやまーきはん花乃まざくう
たちさを女御をちやまーきはん花乃まざくう
みもちぐめつぐさや絵ひるほどにはかーめ文
めじーうおされてるみーうこのやぐひー
くあじーでさやのひろ
（六条院）はうえ柔りも絵あとうへなはうて花又その
うえれわぐ当やをおもしりんちぐくちーめえぐよさ
ーうくくぎをもしやひきる犬との内うをつで
絵つまくにちん（女院のくらし）おうさりまうは絵ひくちまは



ぎそうありひうけさまもつ
おまくれ中にたちもの
我ものとくれわもを
あけてめもをいくも
もも世帯ぐらい思つ
まつてもれこまと年
乃坊りめくんぬくて
んもうくりてにあ
おこひうりぬくうど
如坊ひあこもそ
へまぐく牝まぐ

されどさのふをふ思ひ
ぬもくせとで思ひ
さくあぐ一もちふ
りりどうまつまで
えもまぬるう我
ほぐんもけまで
てあすぬるくめ
ぬやみてもてく
舎れうぎもいとう
てもぐし」まあべ
坂もあのぐちうし

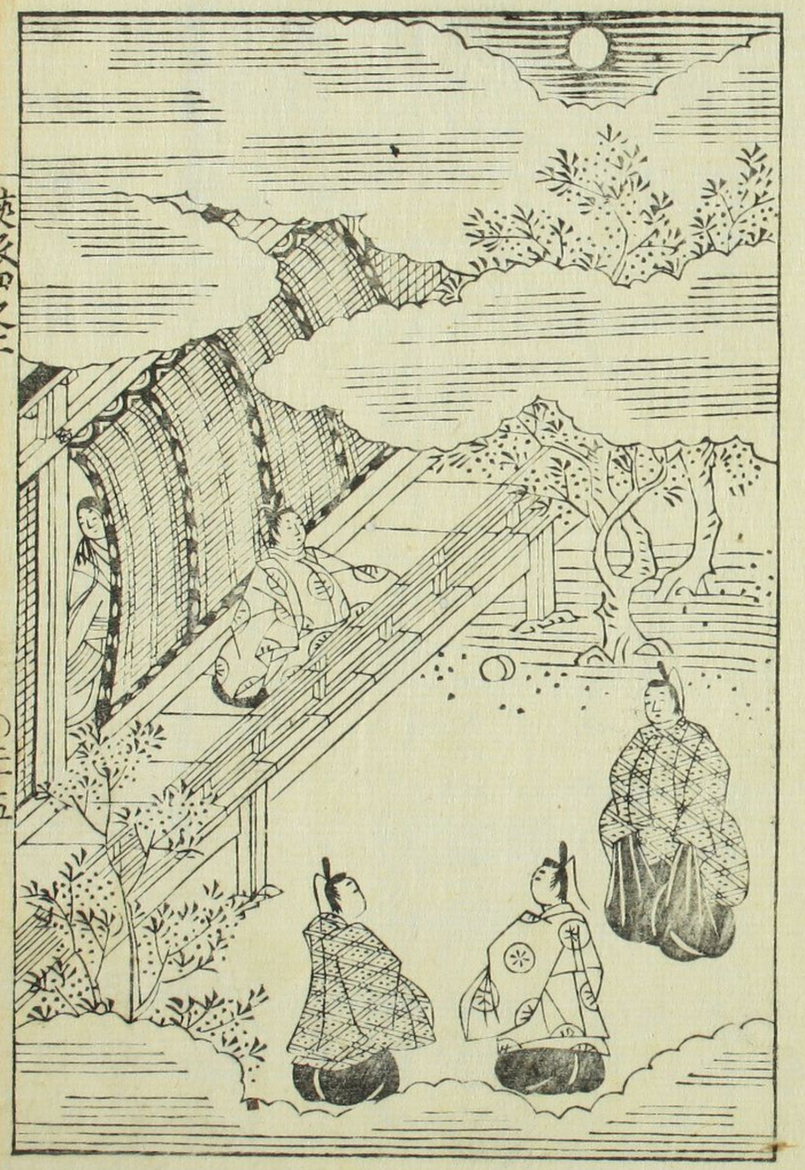
なりたく給ふこと程をそもむさ給ふてのことぞ
娘乃世よさめ口あり給まるよみ給ちそれと女の勢
き給ふ家敷流り給ひぐまち給ひぐまち三の大千世り
つ給てこひむのもり来まてずハ佛り如給りんま
うくくこそ給ふ給ふ給ふはこんさるはこんさるといとくく
そ給ちうち給ひて頃ふ給ふ給ふ給

ばりつる女は屋ぬしのきるをなくへうおを
うまてくる給そうてみまほしきほどのみくくあちくな
あるこのみ乃中もおとさくにまさるべくもあらず
やうるどわぎとよくもめうくちけまとまこつ
き給ひもれをあやしくちづくるへ通うえれお
うきをもなようきこまぐくうらうさげちる物うよる給
まりやうちどきまくまなくるものをとそぞ
ありひもれ給ふなるもはしたなうもあちきあうも
うおとうのへつぶにうやうちの給へちめぬ
さ後うりてあさやのひきるものをとおおぼえり

わづおやまちれんづるうさをなくへうおを
まうべし 訪宮の話 うえうの時 くくあちくな
らんえくそ乃宮めの給へちめぬまとまこつ
もおうくぎにくそ乃宮めの給へちめぬまとまこつ
あちきちくおうれとひうちぶづきまてつづまめ
やくりうふ源氏物語 おうさ源氏物語 みを入通
えまおうん乃れをおくちづてちうめさ源うしし
づつのやうくさせ給へうしものをそれもの世給う
ひちまにかまにかまにか

さぐんちうをもぢ給ふてうくきさきもあが
とるまでんものめしおはばやときこんものをうぐらひ
くおぼこちひほとめきたる人ほさ給あまそうこゝ
給うめれぬうるとうやうとゆめくきさ給ふとごめ
給うめるよさてとつもりしゆめぞかしにあそ
うひ給うまゝねんもうぐらひ
くおうそうれおぼぐらもの
とあまをつてぐうぐ神のありぐ
しまうやうれ給ふんはみそまのうまる
づぶ給ふそ給ふんしき給とうや法門や後世と
そみめありあまをたんめまをものぐうまゝ

人あまをつてぐうぐまをうおうくたなゝみともあゝせ
給うんとおうれみぞざそをもぢ給ふ中うまぶうる
まくしを給ふしものの給ふまをとまるまぐだまみうく
み月給ふ人我とて
猶哀もろまゝやゆめのわうれうまをまゝをまむ
人の後もまでめうまぶうきまたあうんまゝまぐまやまゝき
うまどもう給ふ給ふとあびくゆうまぬぐまやまゝき
まぬうりてまうまぜのひめまでもう給ふまにひんうれまをまたに
もちまやまてまぬうまうまぶうまぬうまうまぶうまぬうまうまぶう

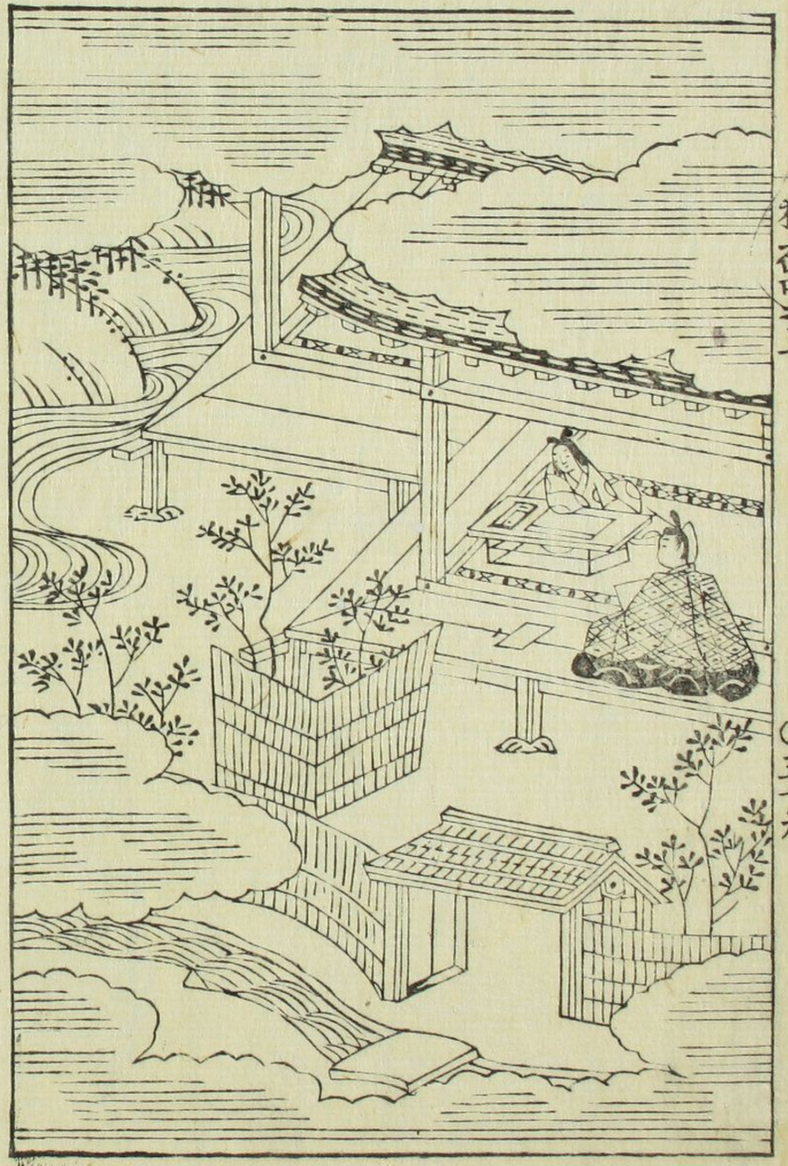


らもものあるさまなれやうもしやうしまぬさ
りこゝのんもいつくちどく思ひさゝ
又まらめり故なの事
ありけさやうるまれ
とのゝ中ちめうめとせめ
ちれ人のまゞらひもや
を学てさもちゝともおも
まつゞもあとやうう
きれちる事をみて
ばゝめうこそのうみを
ありあちんとゝひまる

とてもまゝしてうれやう
きそんゝ面ゝくゝ
ハちるべきうべされ
さらゝ弁ちとつみる
もゝやをのあがゝ
表みてをのゞゝまて
うまてられあでまれ
ゝひでちるゝめ
ちるうゝ女のゝひう
あるとさ面ゝして

さもたゆまずしづかにやもちづきの世
うち出でしづかうち給ひしをいつやうにおぼ
ゆるとおぼしめしたるもをかしくて
ものうさも忘れてたゝかひ給ふもいとをかしう
ありてまゐりぬるなどいつもいつもかくの
みなどおぼしめすにはあらねどいとかたう
ひきてめでたきをいつさ
うにおぼしめしたるもをかしくて
ものうさも忘れてたゝかひ給ふもいとをかしう
ありてまゐりぬるなどいつもいつもかくの
みなどおぼしめすにはあらねどいとかたう
ひきてめでたきをいつさ

ありのすさまじき所
ありさまなどもやうやうしさをもまぜ
を大きなる屋のあらくへしきまゐりこみ
せたるに物へだてのしさまなどもあるにあでや
事おかしきもの
すゞろなるひとのもとにわざとなどもあら
のこまやかなるにあらそひてかきたるも
物へだてたるやうにおくゆかしうもてなし
してもてはやしかしづきたるむすめなどもあ
ものうらやましげなるもの
大なるものゝ



まのそこみそひもみひ
按大納云 水あきこれを
とてとのゝ
ーそこをつ
おぐ一出
まもあとも
いひぐ

ゝとうめまうあ
ーとさかくてだ
もあーびむをあれ
ひとつぎされだちー
ひそひ
ーめよたに
ーんをたぐやさかをさせた
ーせちうさぐんをさて
ーまうあみもるぞや

ゝきこ
按大納云 水あきこれを
ーそこをつ
おぐ一出
まもあとも
いひぐ

ゝきこ
按大納云 水あきこれを
ーそこをつ
おぐ一出
まもあとも
いひぐ

あるじ（大納言）も、さるべきにぞ、うちあはせ給ひけむ、さるものと思ひゆるしそめたまひけるこそ、いとあはれなれ。さて、物語もまだ終はらぬに、春宮（春宮）、「この物語、いかがはべる。」と、御覧じ果てて、「いとあはれなる事かな。姫君（姫君）の母君、いかばかりものを思ひ給へりけむ。」など、御涙ぐみ給ふ。「いかでかは、さばかりは。」など、女房ども、口々申すに、「いとかうしも、あるまじきことなり。」など、宮の仰せらるるを

のもとえんおがくあへぎりくるよふこはなぞとのはうひなまり行くんもさしく海ひがりもるべくそれだ
宰お中おのりとにひ
その中みそ入ひけるまえもち法はうひまう
ぬとこんをあひくく出行ますに例のこ面やう
うらうみ名くる中
装
くるみよおさまの山煙もと北なりひの
おづきまさ所やさ
ひものくまり線くの
つねこよう　とある法うあ
げまる雪みこうし紛へらんもあびもる所まうづけ

まどさくもちぐうる法うをもんとまてめく
うも出まる給ふうりいうへ
とて例のうへぞう義くまる雪みくん
姫君の
おさまの扎のさまのあり月もちる
あべき思ひともびとそありける宰相のさくハ
な線さられいくぼにちるさくつるともあり
あるてうくに海ともしまの給よおまたゆるき
こえ名ひくよ出文
一系のえりおいでる法うあとにひ
さこえのあ所今二三年すさまをまり給ひちん
とこれあるしいくくもさくまひ

ちんやさやうに申ばらひあ〳〵あまでもうこそ死
ん〳〵申やもあまたたまりんのものこそうけてこそう
ちく〳〵よんくしさ給だにすぐさめてもるべう思
ひん〳〵侍てさ給のうへこうるべ歟ぞえものがやう
あんうんざちめさ死まよる歟やうみくもな
狭衣ちあおほ給ありさ侍ん給のこそ
さ一ぶ（狭衣のおとうと）のこそ物さ給ぞ侍ん給ん侍
ありとをかん給ふにあるべう侍ん給まよそ
の男ひやりさうもをかん給ぞうもをれあ
ど〳〵給ん給ん給ぞ時〳〵みてこそう
ちうひ給んさいけうひあるべきうさう歟と

ぞ侍ん給ぞうさうもやあるべ〳〵よさ侍ん歟
こそうさ母うへあやあ〳〵給ん給まへあ
川をみ給さのこあそへとんをまる人をみべうこそ
ぬ〳〵さるたうめづ〳〵歟風ま〳〵むまうつけ
まひてをいやくらるまさまひそのの
ぬそくあべさくまたべひあ君ぬ侍ん給お
ばをうくわ連さへたちまちにまくまるだいふ
〳〵たまん事おもわべ男ひやうべ〳〵人まうせう
連〳〵侍てうべくおひさせ給よもいべ
さ志給んとおべ侍ぐらるべやうもの〳〵それど

一日ゐてもわづかなる世に大将よやゆるしてまし
しあるべくもあらぬことをうらめしくそくちをし
おもへてもあまりいそくらしたる事をおもひとりて
大将のうたんかたちひやうしなまめかしく
狭長 ながうたり思ひもやまほとゝぎす
みちより思ひもやまほとゝぎす
給みてはこゝろもとなくいかゞよりまさ
さうのへぐたくまの法師ばんをうんとようぐまう
らりてたのびおひてことくしくおとし
きさ面おとくおぐをさつまどおえ給つまのよ
まうど歳みやとうぐらめさ面うりとこおへだまに

如法ひめやくわうこうけぐるはさ風をさよ
ち姫人ことをはるもとはさ風をさよ
てあうぐぜうるもう思みぐしおぐしよくあるやうるし姫君ぐひちまをにおぐ
してもまぎぐこうさもうあぐひちまをにおぐ
うさちくみるいおひてんのちはさ風おぐ
やおうりんすてぐくおもちしぐうちおぐ
さくたまみおもちしぐうちおぐ
出らまてうくあさ面をくちおぐ
くちおうりおぐうちおぐ
はそみくひ和んぐろうさ

もあまたゞしやうでてうへのぼうこにまゐり給
へりむかしおもひいでらるゝことなどやそのかみ
ふさ風ふきたてゝくもゐのさくらちりまがひたる
までもてなさせ給ひてあるめへうりやうの法師
ども一ひと人ゞのぼりてさくらの花をかざしにおり
狩
まのこまでおくりたてまつりたまへりけるに
うそもむきけるをせうとのもとよりとぞおりけるうく法師
みぎりのさくらもゝとせをへぬやにおひたちて
んうとひめまつのはうさにおほぞらそのこ
ころのまゝにちりつもれるをはらはでながめ
ゐたるに

やまもとにかんなづきのころまでまうでたりけるに
乃命をたゞそれとたのめとそんともとめてまうでこざりけれ
ばやまのべぎをいでゝかへりみをりてよめる
一首あり後の社をとぶらひてよめる
ありぬともおもひわすれなんやはとよめるに
ひかまにかくしつゝめさ風
まやうにく学ぶと思ふまりやはとよめる
き出てあるさまにのみく波のうちもの
つとやはひそうらひ参りく社もでゆきた

福岡文庫